

勃興期における蒙古人の契約尊重の意識について

高 原 武 雄 *

On the Sense of Respect the Mongols in Their Rising Period Had for Covenants and Its Historical Effects

Takeo TAKAHARA

勃興期における蒙古人には、その社会生活の基準となる様々の規範があったが、ここでは「安苔」「義父子」「罕とその下臣」という人間関係が、契約によって創られたが、それはどのようなものであり、その基礎となった純真な契約尊重の意識について述べ、そしてそれが蒙古統一に果たした役割についてもふれることとする。

I 安 苔 (按達)

(a) 言葉の意味

「元朝秘史」に見える安苔または按達は、モンゴル語 anda の漢字音訳であって契合と訳している。那珂博士は親交なり、元史太祖紀には「交物之友」、畏苔児の伝には「按達者、定交不易之謂也」と見えていと註し、小林高四郎氏は盟友又は義兄弟の意にて、王国維は契丹語に由来すると考証したと述べていると述べ、村上正二氏は「モンゴル秘史」P.58の註に「anda 按苔・按達父系血縁を異にする氏族集団の領袖の間で義兄弟の誓をして、政治同盟を結ぶ習慣が古くからチュルク・モンゴル遊牧民間に見られ、その関係者を互に「アンド」と呼ぶ。その誓には両者が各々貴重していたものを交換し合う習慣があったらしい。」と述べている。

しかし「契合」「交物之友」「定交不易之謂也」「親交」「義兄弟」という訳は、共に適訳とはなし得ないのであって、勃興期における蒙古人の anda という言葉が何を意味したかは、「元朝秘史」の叙述の中に探らなければならない。「元朝秘史」(その訳本である那珂博士著成吉思汗実録による。)の安苔に関する記事は、巻4、(P.145—6)帖木真の父の也速該と王罕との安苔の結び、A巻3、(P.88—90)帖木真と札木合の安苔の由来A、更にA巻8、(P.263—9)札木合の末路に見える。

(b) 也速該王罕の安苔

也速該王罕の安苔の由来は、不亦魯黒汗(王罕の本名)は弟達を殺し叔父の古児罕と戦って敗れ、百人の部下をつれて也速該に頼ったので、助けて古児罕を合申に追い、彼の人民をとりかえたので、安苔の交を結んだの

である。その盟約の辞は「爾のこの恩の報いを爾の子孫の子孫に報い回さんことを皇天后土の祐護にて知しめせ。」(A巻6, P.194, B, 152, C, 159訳意同じ)と述べ子々孫々への報恩を神に誓っている。

帖木真是父也速該の歿後、一族から見放され苦しい生活の中で、援を王罕に求め父の安苔である王罕を父と尊び、父と子の契を交わし、事実王罕の忠実な部下として次第にその勢力を伸ばしたのであって、若し也速該が王罕と安苔を結んでいなかったとすれば、帖木真の名は歴史にのこらなかったであろう。

(c) 帖木真札木合の安苔

篋児乞揚を破ったのち帖木真と札木合は、共に豁兒豁納忽の河原に駐営したが、このとき三度目の安苔の盟をなしたのである。最初は帖木真11才の時鞞石という遊具を交換し、二回目は札木合は骨製の響磬頭と帖木真是木製の鐃矢とを交換し、この度は安苔をし直して親しもうと云って、帖木真是脱黒脱阿から掠め取った黄金の帯と黒馬、札木合は歹児兀孫からの黄金の帯と白馬とを交換して、親交を続けたのであるが、このところに秘史の著者は安苔の守るべき掟として、「曩に老人だちの言を聞き、安苔の人は命一つにて棄て合はず、命の護となるなり。」と記している。(A巻3, P.89, B, P.70, C I, P.212訳意同じ。)「元朝秘史」の原文並にローマ字による蒙文音訳は次の通りである。

兀里都思 <small>在 前</small>	斡脱古孫 <small>老的每的</small>	兀格 <small>性命的</small>	莎那思抽 <small>聽 着</small>
安苔 <small>契 合</small>	古温 <small>人</small>	阿民 <small>性 命</small>	你刊 不祿 帖卜赤勒敦 <small>一箇 不 相 刺 衆</small>
阿米納 <small>性 命 的</small>	阿(不)里黒赤 <small>救 護 馬</small>	孛魯由 <small>做 有</small>	客延 <small>慶 道</small>

K. Shiratori, Uridus ötögüs ün üge sonosču
 E. Haenish, Urids otogus un uge sonosču
 ("Anda Kügün amin nigen ülü tebedün
 anda gu'un amin nikan ulu tebedün.
 amin-u aburiyçi boluju" kegen
 amin o arici boluyu keyen
 (白鳥庫吉博士 蒙文音訳 元朝秘史卷3, P. 27b
 E. Haenish Die geheime geschichte der Mongolen
 P. 30)

豁兒豁納黒河原での1年有半におよぶ共同生活の
 ち、両友はここを起って他に移動することとなったが、
 これを機に帖木真是王罕と離れた。やがて帖木真・札木
 合は共に罕位に上ったが、二度も戦場で雌雄を争うにい
 たった。が闊亦田の戦に雷雨が己の陣營に注ぎ、戦わず
 して全軍が潰滅した。以来札木合は再び起つことができ
 なかった。或は王罕に頼りつゝには乃蛮にも身を寄せた
 が、勢力の挽回は成らず、ついに従者に捕えられて安苔
 帖木真の前に敗残の身を現わしたのは、成吉思第二次即
 位の頃であった。

(d) 札木合の最後と慚悔のことは

「秘史」の著者はここに、若き日には安苔として親し
 み助け合い、ついに宿命的なライバルとしてモンゴル
 高原に王座を争うにいたった二人の安苔の友情を、余す
 となく描き尽くし読むもの感歎おくあたわざるもの
 がある。成吉思は正主札木合を捕えた不忠の部下をその
 面前で斬り殺した。そして幼い時以来の友情を呼び戻
 し、離れていても互にその心は通い、戦場で戦ったとき
 も共に友の身を案じ、合刺合勒只惕の戦には王罕の述べ
 た言葉を密告し、乃蛮戦には太陽罕を言葉で恐れさせて
 俺を援けた恩は忘れない。と述べて若い時以来の交友を
 思い起こさせ、次いで札木合の言葉を求めた。札木合は
 幼い時の友情を語り、傍の人の唆かしによって、言ひ合
 った安苔の約束の言葉にそむいてしまったので、恥かしく
 て君の顔を見ることができなくなって行ってしまっ
 った。しかし君は私の背信をゆるして再び友となろうと
 申ししてくれるが、私は「友となるべき時に伴とならざり
 き、我」(友達を君が必要とするときにの意)今やモン
 ゴルの統一も成就した。君は大罕の位にも登った。

今君の情けで生き永らえても君の助けとはならず、か
 えって君の心を苦しめることもなるであろう。ここで
 札木合は成吉思に勝れた理由を綿々と述べ、血を流
 さずに殺して頂きたい、さすがに死骸は高い処にあって
 君の子孫を守護するであろう、と述べた。成吉思は安苔
 は外に行って口一杯に譏っても、私を殺そうなどと考
 えたことはなかった。立派な人であった。しかし彼は私の
 言葉はきかず死を求めている。死を与えようとして占
 ったが殺せとは出ない。理由なく人を殺してはならない。
 やむなく苔闊巴勒主惕の戦に我を恐れさせたことを罪と

し、希望によって血を出さないで殺すこととした。そし
 てその骸は礼をもって厚く葬ったと結んでいる。(A巻
 8, P.263—9, B, P.195—9, C, P.326—34訳意同じ。)
 あくまで安苔の道を守ろうとする成吉思汗、不幸他人
 の唆かしを信じて安苔の約束を破った盟友慚悔の情を余
 すところなく描写している。

(e) ま と め

以上 (a)(b)(c)(d) において安苔という社会慣習がど
 のようなものであり、それがモンゴルの統一にどのよう
 な影響を及ぼしたかについて、「元朝秘史」によつての
 べたのであるが、(1)帖木真が札木合と安苔を結んだの
 は、彼11才の時、也速該は既に他界しその部衆は離散
 していたとしても、将来乞顔氏の領袖となるべき身分で
 あり札木合も札苔囉の首長となるべき生れであつて、又
 王罕は客喇亦惕の首領、也速該は泰赤兀惕の領袖であ
 り、合刺合勒只惕戦に偉勲を立てた忽亦勒答兒は帖木真
 と安苔であつたが、彼は忙忽惕の領袖であつて共に父系
 血縁を異にしている。「安苔は父系血縁を異にする氏族
 集団の領袖の間で、義兄弟の誓をなし政治同盟をする慣
 習が古くからチュルク・モンゴルの遊牧民の間で見ら
 れ、盟約者は互に各々貴重にしていたものを交換して契
 約したという村上正二氏(C, P.158の註)の説は正しい。
 「元史」太祖紀の「交物之友」は貴重物交換の慣習
 に着目したものであろう。(2)又上述の物語から察せら
 れることは、安苔の人はその言い交わした誓約を守りお
 互にその生命を一つと心得、守り合うことがその掟であ
 つたのであつて、この誓約に背くことは許し難いことであ
 つたのである。元史畏答兒すなわち忽亦勒答兒の伝に
 「按達者定交不易之謂也」と記しているのは安苔の掟
 に注目したものである。(3)ルネ・グルッセがその著
 ジンギスカン^{世界の征服者}(橋正路訳) P.37に「このような同盟が
 なかったならば、ジンギスカンの生涯もありえなかったこ
 とを忘れてはならない」と王罕と帖木真の父也速該の安
 苔を評していることは正しい評価であつて、若しこのこ
 とがなかったならば、帖木真是当時モンゴル高原の実力
 者王罕に頼ることもできなかったであろう。そして安苔
 札木合の協力がなかったならば、篋兒乞惕への復讐も孛
 児帖の奪還も不可能であつたと思われるのである。

要するに当時のように罕達が互に対立抗争し、離合集
 散常なき社会において、族長の間には交わされた政治同盟
 の誓がもっていた力は極めて大きく、その歴史的意義も
 等閑に付し得ないものがあつたのであるが、最後に「秘
 史」の著者が綴った札木合の言葉をかりて、安苔の規範
 意識を今一度明らかにしておく。

「傍の人に動かされ、横恣なる人に教唆かれて、〔愚
 かしくも〕別離れてしまひぬ。堅き〔誓いの〕言の葉を
 言い交したるも、黒き面の皮を剥がされしため、近づき

かねて、カン・アング〔汝が〕暖かき顔を見る能はざるわれなりし、忘れ得ぬ言の葉を言い交せしも、赤き面の皮を剥がされしため、心寛きわがアングよ〔汝が〕真実ある顔を見る能はざるわれなりし」（C2巻, P.330 による。A, P.165—6, B, P.197 訳意同じ。）

II 父と子の盟約

(a) 第一次父と子の盟

帖木真是孛兒帖を迎えると間もなく、父の安蒼であった王罕を訪ねた。そして「前の日我が父に安蒼と云ひ合ひたりき、爾。父にも等しくあるぞ」といって引出物の裘を王罕に与えた。

王罕は喜んで「黒き貂鼠の裘の返礼に、離れたる汝の部衆を纏め合ひて与へん。腰の尖に腔子の胸に在れ」といった。これが「秘史」が伝える王罕・帖木真の第一次父と子の盟約であって、この義父子の関係は1199年第一次乃蛮征伐まで続くのである。（A, P.74 による。B, 47—8, C, P.155—6, 訳意同じ。）

(b) 王罕・帖木真の親交

帖木真が篋兒乞揚に孛兒帖を奪われた時にも、王罕は札木合と協同して妻を奪還してくれた。離れた部衆も集まって帖木真は、1189年に第一次の即位をしたが、王罕はわが事のように喜んだ。帖木真と安蒼札木合は、札木合の弟が帖木真の部下に殺されたので苔蘭巴勒主楊に戦い両者は離れることとなった。1196年の塔塔兒征伐のときにも、王罕は共同して出征し大勝した。別かれた札木合が11部に推されて古兒罕となり（1201年）闊亦田の戦となったが、この時も義父王罕は帖木真の側にあった。この戦に敗れた札木合は没落の一途を辿るのである。その後王罕が弟と争って敗れ諸国を流浪の末成吉思に頼った時には、厚遇して子の義務を果し、共に篋兒乞揚を攻めて王罕に勢力挽回の機会を与えた。帖木真と王罕は共に乃蛮を攻めたが、姦雄札木合の唆しによって、王罕は心交りをして帖木真を戦場に置き去りにした。がかえって乃蛮の勇将可克薛兀撒卜喇黒の追撃をうけ、わが子桑昆の妻子は虜となった。これを知った帖木真は四傑を遣わして、苦戦中の桑昆を助けその妻子をとり戻してやった。

(c) 第二回の父子の盟

この時に王罕は帖木真を兄とし桑昆を弟とし、再び父子の盟約を結んだが、その時の盟約の辞は、「言を言ひ合へらく「多き敵のところを奔るには共に一つに奔らん。野の獣のところを囲獵するには、一つ共に圍獵せん」と云ひ合へり。又成吉思合罕二人言ひ合へらく「我等二人を妬みて、牙ある蛇に唆されば〔彼の〕唆しに勿入り。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。

大牙ある蛇に離間せられば、彼の離間を勿入り。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。大牙ある蛇に離間せられば彼の離間を勿取り合ひ。口にて舌にて証し合ひて信ぜん」と云ひ、かく言を極め合ひて、親みて住み合へり。」A, 巻5, P.166, B, P.130, C, P.77 訳意同じ、1202～3年のことなり。）と「元朝秘史」は記している。

(d) 札木合の策謀と王罕の背信

札木合は衆に推されて反帖木真同盟をつくり、桑昆を唆かし桑昆はまた父王罕に哀訴したので、王罕はわが子の愛にほだされて成吉思汗謀殺の計画を黙認した。帖木真は蒙力克額赤格の警告によって難を免れた。事の発覚を知り王罕・桑昆・札木合の連合軍は帖木真を急襲することとなった。巴歹・乞失里黒の密告により急を知った成吉思は、離脱をはかったが合刺合勒只楊の野で追いつかれ、ここで激戦を展開したが、勝負はつかなかった。

(e) Juvaini の報告

以上は「元朝秘史」の伝えるところであるが、イスラムの史家 Juvaini は以上の出来事を次のように報告している。

Upon every occasion, by reason of the nearness of their confinness and the proximity of their territories, he used to visit Ong-Khan, and there was a feeling of friendship between them. When Ong-Khan beheld his counsel and discernment, his valour, splendour and majesty, he marvelled at his courage and energy and did all that lay in his power to advance and honour him. Day by day he raised his station and position, until all affairs of state were depend upon him………The sons and brothers of Ong-Khan and his courtiers and favourrites became envious of the ranks and favour he enjoyed; they accordingly cast the nets of guile across the passage provided by opportunity and set the traps of treachery to effect the blackening of his name; ……… Since it was impossible to attack him and break with him openly, he thought to remove him by craft and guile and hinder by fraud and treachery God's secret design fourtifying him.………王罕帖木真の父子盟約のことは載せていないが Juvaini は「秘史」の所伝を抽象的に巧に叙述している。

(f) 王罕の背信を成吉思汗の問責

合刺合勒只楊より苦しい離脱退陣の中で、王罕と阿勒壇忽察兒等の背信行為を問責する二人の使者を送ったが、その口上は理路整然たるものがある。これを聞いて王罕は慚愧にたえず、悔痛のあまり第三回目の誓の言葉

を次のごとく述べたと載せている。

「嗚呼息苦しき〔かな〕我が子より離る、道理よりやは離れたる。分るる関係よりやは分れたる、我」と云ひ、心艱みて言はく「今子を見て悪しく思はば、かくの如く血を出されん（殺されん）と誓ひて、小指を弾き、箭削る小刀にて刺して血を流して、少き樺桶に盛りて「我が子に与へよ」と云ひて遣りぬ。」（A、巻6、P.200、B、P.155、C、P.164、訳意同じ。）「秘史」の原文と蒙文音訳は次の通りである。但し○印のところのみ。（巻6、P.33b）

額朶額 <small>如今</small>	可兀一 [○] 邊 <small>子目的行</small>	兀者周 <small>看者</small>	卯 [○] 夜 <small>夕</small>	薛 [○] <small>想</small>	乞額速 <small>阿</small>
額捏 [○] 篋圖 <small>遠般</small>	赤速一班 <small>血目的(行)</small>	合兒合 [○] 答速 <small>彼出者我</small>	客延 <small>際道</small>		

蒙文音訳 K. Shiratori Edöge kögu-ben üzezü
E. Haenish edo'e ko'u ben ujeju
(ma'ui sedkigesü ene metü çisu ban yarγaydasu kegen
mao'ui setki'esu ene metu cisu ban harhahdasu keyen

思うにこのような血盟の慣習は当時モンゴルにおいても存在したものと思う。成吉思は身の危険を感じて東方に隠匿れたのち、使者を遣わして敵情を探ぐり、王罕が勝利の筵会をしている不意を衝いて者々額児山の入口にて最後の勝利を収めたのである。

(g) ま と め

以上は「秘史」によって、也速該と王罕の安答の盟約によって生れた王罕帖木真的誓約がどのようなものであり、これが成吉思の蒙古統一にどのような役割を演じたかについて述べたのであるが、成吉思が古来稀に見る資質をもっていたとしても、王罕の庇護と協力がなかったならば、前にも述べたように成吉思の蒙古統一もなかったであろう。

しかし契約による父子の関係は、第一次には「引出物を持って父として頼って来たのだから、離れた部衆をとり戻してやろう。」というものであり、第二次の盟約は「離間策には乗るまい。話し合うて疑はという。共同して策戦をしよう。」というものであった。第三次の誓約は「君を疑ったら殺してくれ。」というものであるが、「罕推戴の辞」や「安答」のように契約の誓詞が一定していないところから見ると、モンゴル古来の慣習というものでなく、全く特異なものであったと思われる。しかしながらここに注意すべきことは、特に第三次盟約の辞から伺えることは、「誓約を破ってはならない。破約はモンゴル人の恥であって、誓約違反は死に値する。」とする社会規範が、当時存在していたものと考えられる。

Ⅲ 罕と下臣との関係

勃興時における蒙古の罕とその下臣との関係については「愛知工業大学研究報告No. 8, 1973」に詳しく論述

したところであるが、周知のごとく当時モンゴル高原に活躍した罕達は、クリルタ（忽鄰勒塔）又はクリルタイと呼ばれた族長達の合議によって推戴せられたのであるが、その時述べられた宣誓の辞は「戦には先鋒となり、戦利品を献上しましょう。獸を罫猟するときには、他の者に先駆けて、獲物を献上しましょう。戦の日にあなたの号令に違った時には、吾々の頭を刎ねて大地に棄てて下さい。泰平の日に貴方の協議を守らないときは、人煙たえた地に棄てて下さい。というのであるが、これは罕の権利と義務とを現わすものとするウラヂミルツォフ・ラシッドの見解、下臣の義務を卒直に表現するものと見る那珂博士の説、戦利品や獲物に対する罕の優先取得権と違反者に対する罰則の峻厳さを示すものであるとする村上正二氏の解釈等はあるが、私はこの宣誓の文からは、罕の義務を見出すことはできない。峻厳な軍律と素朴にして忠順な下臣の義務を表現するものと見るのである。成吉思汗が1189年第一次に即位した頃は、このような契約は十分に守られていなかったのであるが、契約尊重の規範意識は厳然として存在していたのである。1196年成吉思罕は王罕を誘って、金の王京丞相の塔々児征伐に協力して大勝した。が主兒勒部の撒察・別乞、泰出は軍令にそむいて戦に加らず、かえって成吉思の留守中の小駐營を襲い、五十人の衣服を剥ぎとり十人の者を殺した。これを知った成吉思は主兒勒を攻めて主領撒察・別乞、泰出の二人を捕えた。その時の状況を「秘史」の著者は次のように伝えている。

「取り抑えて〔たのち〕、チンギス・カハンが、〔この〕サチャ・ベキ、タイチュの二人に申すよう、「昔、われらはなんと申し合わせたか」と〔そう〕言われて、サチャ・ベキ、タイチュの二人が〔心に恥じて〕申すよう、〔確かに〕申し合わせた言葉にわれらは従わなかった。われらの〔申し合わせた〕言葉どおりにしたまへ」と言つて、自分の言葉（決意のほど）を告げ知らせ、〔身を〕委ねた。彼等の言葉を知らされたので、〔チンギス・カハンは〕その言葉どおりに〔二人〕を片づけて、その場に捨て〔去つ〕た。（C巻4、P.299による。A、P.188—9は、任せ（頸を伸べ）と与えたり。と訳すB、P.95—6訳意同じ。）「秘史」の原文と蒙文音訳を次に掲げる但し○印のところのみ。蒙文音訳元朝秘史巻4、P.20a、bによる。

鳴訖列 [○] <small>説了</small>	兀格一都里一額 <small>言語 妄自目的行</small>	巴 <small>俺</small>	額薛 <small>不爾</small>	古兒罷 <small>到了</small>
兀格昔一突兒 <small>言語 每妄</small>	馬納 <small>俺的</small>	古兒格 <small>教到</small>	客額額 <small>説了</small>	
兀格昔一額 <small>言語 每自目的行</small>	篋迭列周 <small>報知者</small>	土失周 <small>與了</small>	翰克罷 <small>與了</small>	

K. Shiratori "Ügülegsen üge-dür(i)-jen ba
E. Haenisch "Uguleksen uge dur iyen ba
ese kürbe Üges-tür man-u kürge"kegeged
(ese gurbe uges tur mano gurge ke'e'et.
üges(i)jen mederežü tüsižü ögbe
uges iyen medereju tus'iju okbe

さて撒察・別乞、泰出捕殺のこと「元史」太祖紀にはほぼ同様の記事が見え、「帝復伐薛徹大丑追至帖烈徒之隘滅之」とある。親征録の記事は元史に似たり。ドーソンはP.83に1197年王罕と共同出馬薛徹泰出二人を虜にせりと記している。しかし共に二人の言は載せていない。

まとめ

1189年帖木真を罕に推戴したときその協議の中心人物は、阿勒壇、忽察兒、撒察・別乞などであるが、その8年後1197年に撒察・別乞、泰出が早くも宣誓の契を破ったので処刑せられた。主兒勤部は合不勒罕の直系にあたり、言わば孛児只斤家の本家をなすものであり、帖木真是分家一門を代表するにすぎなかったが、彼の推戴者の中心人物であり本家の頭領人物といえども誓約違反を許さなかったのである。

ここに誠実を愛し法を尊重した成吉思の人格の一端をうかがいするのである。ルネ・グルッセは罕推戴の辞の後半を呪の言葉であると見ているが、(ジンギスカン橋正路訳 P.105)モンゴル人誓約の内容は極めて具体的であって、決して空念仏ではなかったのである。「秘史」の著者はここでも誓約を守って死ぬことを誇りとする当時のモンゴル武人の心意気を遺憾なく描出している。

IV 結論(契約尊重の意識)

以上「安苔」「義父子」「罕とその下臣」という人間関係について、「元朝秘史」を中心に探ったのであるが、その(一)はそれがすべて自主的な口頭の契約によって創られたということである。その(二)は契約の内容がきわめて具体的であって曖昧なところがないということである。その(三)は札木合慚悔の言葉にも王罕の痛悔の語にも、武人らしい撒察、泰出の態度にも溢れ出るものは契約尊重の意識であって、生命を賭して口約を遵守しようという意識が「秘史」の著者の筆をかりて、赤裸々に浮き彫りされていることである。換言するならば当時のモンゴル人は誠実であることを誇りとしていたのである。

「秘史」から伺えるものは罕や族長達上層階級の人々の言葉であるが、兵士や庶民いわゆる下層階級の人々の心を知る史料はないが、誠実という点で罕や族長に劣るところはなかったと私は見るのである。英邁で至誠を愛した成吉思はこのモンゴル人の特質に着眼しこれを拠りどころとし、これを鼓吹し激励して忠順な部下の育成につとめたのであるが、このことについては稿を改めて述べる。最後に「秘史」に見える蒙古人の契約観念を窺う今一つの史料を掲げて結びとする。

王罕、帖木真、札木合は孛児乞揚征伐の集結地を孛脱罕孛兒只ときめ、札木合は約束の日時に到着したが、王罕、帖木真是三日後れた。その時札木合は次のように二者の約束違反を咎めた。

「吹雪になるとも約束には 雨になるとも集りには 遅れじとこそ 誓わざりしか蒙古人[◎]がよしと[◎]言え[◎]ば 誓ったことではな[◎]かったのか〔その〕よし[◎]から遅れた者は 仲間から外そうと言[◎]い合[◎]ったはずであ[◎]ったが」といった。〔そうした〕ジャムカの言葉に、トオリル・カンは「約束の地に三日も遅れて陣立した罪咎は、ジャムカ弟が〔よきように〕取り扱え」と云った。約束〔に違反したる〕咎め立てをこのように言い交してから……(C巻3, P.184—5による。A, P.80—1, B, P.64—5 訳意同じ。)

参考文献

- | | | | |
|-------------|--|------|------|
| 那珂 通世著 | 成吉思汗実録 | 1943 | 略号 A |
| 小林高四郎著 | 蒙古の秘史 | 1941 | 略号 B |
| 村上 正二著 | モンゴル秘史 | 1970 | 略号 C |
| 元 史 | | | |
| 親征録 | | | |
| 白鳥 庫吉 著 | 音訳蒙文元朝秘史 | 1942 | |
| ドーソン 著 | 蒙古史 (田中萃一郎訳) | 1939 | |
| E. HAENISCH | MANGHOL UN NIUCA TOBCA' AN DIE GEHEIME GESCHICHTE DER MONGOLEN | 1937 | |
| JUVAINI | THE HISTORY OF THE WORLD- CONQUEROR (J.A. BOYLE訳) | 1958 | |
| ルネ・グルッセ | ^{世界の征服者} ジンギス汗 (橋正路訳) | 1973 | |